日本ハリストス正教会教団・西日本主教教区報

西日本正教

No.144

Summer, 2018

西日本主教教区宗務局
604-0965　京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283
京都ハリストス正教会内
Email: ocj_kyoto@yahoo.co.jp
電話・FAX　(075)231-2453
郵便振替　01030-5-18547

隣地を購入し、駐車場を整備した名古屋ハリストス正教会・神現聖堂
道幅が三倍になり、新たに八台分の駐車スペースを確保。

西日本主教教区　教区会議

六月一七日

さる六月一七日（日）西日本主教教区「教区会議」が大阪正教会、生神女庇護聖堂を会場に開催。昨年とはちがい、病気から快復されたダニイル府主教座下をお迎えし会議が進行いたしました。

司祭会議・教区理事会（一五日・一六日）

教区会議開催に向け、一五日（金）午後一時半～司祭会議、一六日（土）午前司祭会議、午後一時会計監査、二時～理事会。理事会では、過年度と新年度の業務報告・計画（及川）、財務諮問委（松島師）、諸規則委（後藤師）、宣教企画委（伊藤師）、決算報告（教区センター含）・監査報告・予算案説明・承認（佐藤財務部長）、教区宣教献金の概要・御礼等、これらすべてを原案どおり本会議にかける事が決議、承認されました

教区会議　新年度教区活動と懇親会

一七日（日）午前主日聖体礼儀、十字架接吻の前に、ダニイル座下から大阪正教会へ記念の聖像の贈呈。教区内各教会から、ダニイル座下八〇歳の記念品の贈呈、「幾歳も」斉唱が行われました。

昼食後すぐに本会議。議長ダニイル座下のご指名により副議長に松島師・佐藤孝雄兄ほか議事役員の選任のあと議事進行。理事会から上程された過年度と新年度の業務報告・計画、教団三委員会報告、財務部長から決算報告（教区センター含）・監査報告・予算案の説明と承認等が行われました。会計監査の半田幸子姉（名古屋）が退任、新たに大藪清兄（高松）が選任されました。半田姉ありがとうございました。

宣教・牧会に関する懇談会では、大阪の山川兄の提題をうけ、松島師の司会で意見交換が行われました。

宣教活動としては教区センターを活かした講演会・教区協賛行事、冬季セミナー、イコン展、コンサートなど。大阪での奉神礼基礎講座、広島祈祷集会など。出版物、西日本正教年二回発行、宣教冊子、宣教献金募集広報は一一月。

さいごに七月全国公会代議員が選任され、四時に会議終了、記念写真。大阪婦人会による温かなおもてなしの懇親会。広大な西日本各地から参集した信徒の皆様、ありがとうございました。

（及川記）

全国公会　開催

七月七日（土）

東京ニコライ会館において、一三時半開会祈祷、ダニイル府主教座下の開会宣言により一八年度全国公会を開始。議長ダニイル座下のご指名により、副議長・書記・議事録署名人・議事運営委員等が選任された。そのあと副議長の司会のもと、ダニイル座下の訓示、小池師の教団活動報告、財務諮問委（松島師）、全国宣教企画委（伊藤師）、諸規則検討委（桝田師）、セラフィム大主教座下による五月下旬のロシアでの主教会議の経緯説明など、議事が順調に進行した。

夕方六時から東京復活大聖堂で晩祷が執り行われた。

七月八日（日）

午前中、ダニイル府主教座下、セラフィム大主教座下、全国の司祭が陪祷する主日聖体礼儀。説教、川島大神学生、領聖後、教役者記憶リティヤが執行された。

昼食後、公会第二日目の日程案に沿って議事再開、過年度決算報告（小島財務部長）・監査報告、予算案上程が行われ、いずれも全会一致で承認。会計監査の選任などの議事のあと、セラフィム座下の閉会の言葉、大阪正教会提唱の宣教懇談会が、松島師の司会により行われた。

閉会祈祷、記念写真、祝賀会をもって公会は無事終了した。残念ながら西日本豪雨の影響で、福岡の市来兄、高松の大藪兄、徳島の赤澤兄が欠席された。

大阪北部地震、豪雨被災地域の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

遠く西日本から出席された皆様、猛暑の中ありがとうございました。

（及川記）

教団人事（九月一日発令予定）

☆静岡正教会（浜松含）
管轄任命祝福長司祭　イオアン小野貞治師　（東京離任）

☆東京復活大聖堂教会
管轄任命祝福司祭　ガヴリイル田中和幸師　（静岡離任）

任命祝福副輔祭　ソロモン川島大先生　（神学院卒）

☆教団（東京）
教団事務長司祭　ディミトリイ田中仁一師（小田原）
教団会計監査　ミハイル佐藤孝雄兄（京都）

講話

「病と癒やし」

司祭エフレム後藤悠太

罪と病

彼の自由と自由ならざる罪過を赦して速やかに病の床より起こし給え、・・・（病者平癒の祈祷）

教会が病の癒しを祈る時、必ず罪の赦しをも願います。それは病と罪とが密接に関わっていると教会が考えているためです。しかし、個人の罪がその人の病を引き起こしたかどうか、ということについては慎重に考えなければいけません。

確かに、たばこを大量に吸う方が肺がんになったり、あるいは暴飲暴食を繰り返している方が生活習慣病になったとしたなら、それはある程度は自分の責任である、と言えるでしょう。けれども、もし幼児が病をもって生まれてきたとしたら、果たして罪があると言えるでしょうか。何かの罪に対する罰だと言えるでしょうか。

正教会は病を罰であるとは考えません。むしろ、堕落した世全体の必然的な結果であると見なします。病、苦しみ、死は神と人間が断絶したことの結果です。アダムの初めの罪によって、その影響はまるで伝染するかのように、全人類へ、そして人間を通して全世界へと広がりました。私たちは誰しもが、産まれた瞬間から、病への、老化への、死へのプロセスの中に放り込まれます。罪を犯した時、私たちは自分の病へのプロセスに拍車をかけることもあるかもしれません。けれどもより重要なのは、個人が罪を犯そうと犯さないとに関わらず、このプロセスの中に、堕落した世の中に生きていることに変わりない、ということです。

廉施者聖パンテレイモン

病の現実

「もうどうにもしようのないのは、あなたもご承知なんでしょう。それならうっちゃっといて下さらんか。」

「苦痛を軽くすることはできますよ。」と医者は答えた。

「それさえできやしないんだ。うっちゃって下さい。」

（トルストイ『イワン・イリッチの死』米川正夫訳）

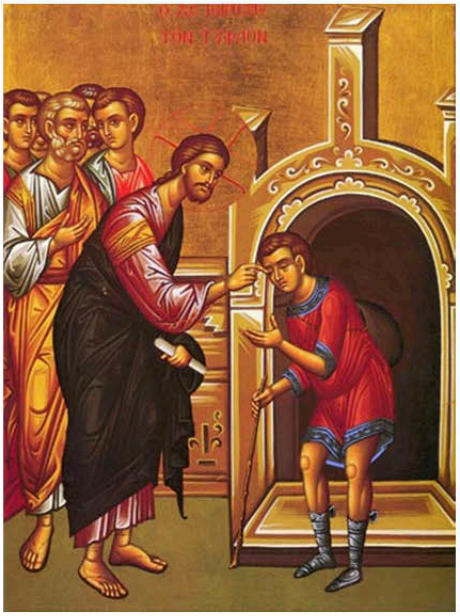
実際のところ病ほど、そしてそれが重いものである程、人の精神を荒涼とさせるものはありません。これはトルストイの小説で主人公が死にせまった時、自分の医者に言ったセリフです。重い病にかかった時、私たちが言うことができるのは、人に対してせめて「うっちゃってくれ。」「放っておいてくれ」というのが、精いっぱいです。その後、この小説の主人公は作者のトルストイと同じく、正教会に積極的な意味を見出すことはありません。けれども、この小説は病の現実を余すところなく描写していることも事実です。

病ほど、人を孤立させるものはありません。自宅で療養するにせよ、あるいは病院で入院するにせよ、人は社会から切り離されます。誰かが付き添ってくれたとしても、人は孤独を感じます。生き抜くため、そして厳しい状況に順応していくために、多くのエネルギーが割かれ、人と関わろうとする力が残されていないこともあります。病にかかった時、人は元気で健康な人と共有できるものが少ない、と感じ、孤独になることもあるでしょう。また、以前は社会の中で、家庭の中で役割を果たしていたのに、今は人に頼り切りである、ということに愕然とすることもあるでしょう。病はこれまで存在していた人と人との関係を変え、また人と人の交わりを断つことすらあります。

病は人を神からも遠ざけることがあります。物理的に教会に行くことができなくなるだけではありません。ある人は、この状況は神のせいである、と恨むこと

もあるでしょう。またある人は、生きる意味が失われたように感じ、精神的に立ち直れないこともあるでしょう。自分が死すべき存在であることを改めて実感し、未来が奪われたと感じるからです。罪と病、死が支配するこの堕落した世界に否が応でも向き合わざるを得なくなり、神を見失うこともあるでしょう。

病は身体の問題だけではなく、このように心の問題でもあります。そして、ちょうどアダムの初めの罪が病を引き起こしたように、病もまた人を罪に引き込む可能性があります。なぜなら罪とは、人との交わり、神との交わりから離れること、そのものだからです。教会の役割とは、まさにこの現実に関わることにあります。



瞽者の主日

体の癒し

教会は身体の癒しを神に祈り、願います。けれども、教会が専門的な医療の役割に取って代わろう、ということではありません。なぜなら、神は医療従事者の手を通しても、働かれているからです。また、神は人間に医療技術を発達させる知恵をお与えになったからです。つまり、癒しの究極的な源は常に神にあります。

医療に従事する人は、神の癒しのプロセスの手助けをされている、と言うことができます。しかし、彼らがこの癒しを完全にコントロールしている、という訳ではありません。ある人は、ある処置に対して良い結果を生むこととなるでしょうが、また別のある人はそうではないかもしれません。また医療の専門家から見ても、奇跡としか言いようのない回復をされる患者もいます。このように考えますと、全ての身体的な癒しは、常に神の賜物です。

教会の癒し

しかし、教会の与える癒しは、身体的なものに限りません。ともすれば、医療の分野が苦手としている魂の癒し、霊的な癒しをも含んだ、総体的なものであります。

冒頭に書きましたように、教会は、病を肉体的なもの、心のものをも含めて、それをアダムの堕落の結果、あるいは現れの一つと見なしています。アダムの堕落によって、全ての人間が、そして宇宙全体が影響を受けました。病自体が根源的な問題なのではなく、病は言ってしまえば、堕落の一つの症状に過ぎません。そして、堕落によってもたらされる、もっと深刻な問題は、先ほど述べましたように、神と人との交わり、そして人間同士の交わりが断絶されることです。クリスチャンにとって、神との断絶、そしてその結果もたらされる「霊的な死」は、まさに悲劇としか言いようがありません。

聖傅機密

では、病によって引き起こされる断絶に、教会はどのように向かい合ってきたのでしょうか。聖傅機密（せいふきみつ）という祈祷が教会にはあります。重大な病にかかった病者に対して、油を塗り、神からの癒しを求める機密です。

聖傅機密は七人の司祭によって行われなければいけない、という規定があります（もちろんいない場合は、一人でも行うことができます。）。教会において「七」とは、象徴的に「完全」を表す数字です。つまり「七人の司祭」ということは、この機密において、教会全体が関わらなければいけないことを意味しています。自宅で行われようが、病室で行われようが、聖傅機密は教会によって行われるのです。

またこの機密を行うのには数時間かかります。かつてはまるまる一週間かけて行われていました。それは、教会全体が、病者が苦しい時、彼を支えるために共にいたことを表しています。その意味で、

この機密は病者の孤立を打ち破ります。なぜなら病者が人生の深刻な岐路にある時（そしてそれは誰しもが経験しなければならない時でもあります）、ハリストスと教会が共に彼を支え続けるからです。たとえ都合により省略された形で祈祷が行われたとしても、その意味は変わりません。

そして、この機密において、病者の人生の「未来」が回復されます。ハリストスにおいて「死」は存在しません。病や死は人を捕える牢獄ではなく、新たな生命への門となりました。また病者の人生の「目的」が回復されます。病の苦しみは、ハリストスの十字架と結びつけられるからです。苦しみは「致命（殉教）」となります。なぜなら、病の苦しみは、私たちのどんな言葉や行いよりも、私たちの信仰を証しするものだからです。

これらが、聖傅機密が主に目的とするものです。機密の中では身体的な癒しのためにも祈られますし、もしそれが与えられれば、もちろん私たちは感謝しなければなりません。しかし、それが主な目的ではありません。イイススが癒された人々、また蘇らせられた人々は、当然のことながら、今この世にはいません。それと同じように、神から身体的な癒しを受けた人々でも、最終的にはまた病にかかり、死んでしまいます。ですから、教会における癒しの最終的な目的とは、堕落し、病と死を被らなければいけなくなった人間が、ハリストスとの交わりを回復すること、地上の天国の現れである教会との交わりを回復することにあります。

教区の活動

第二回奉神礼基礎講座

三月二一日、大斎の祈祷をテーマに奉神礼基礎講座が開かれ、二四名（うち大阪から一二名）が参加しました。講義に先立ち、七時から大斎早課、時課、十時から講座の開始。マリア松島姉による講義「大斎の晩課聖体礼儀の特徴」、午後からは誦経の基本である「まっすぐに、しかも進んでいく聖詠唱」をニコライ松田輔祭の指導で実習しました。午後三時からはエフレム後藤神父による講話「先備聖体礼儀について」。講義終了後、聖堂に移って、晩に行う「晩課、先備聖体礼儀」を体験しました。誦経は参加者が分担して行い「願わくは我が祈りは」は三部合唱のリフレインと誦経のソロの掛け合いで歌いました。先備聖体礼儀は初めてという参加者もあり、地方の教会でも「大斎の平日祈祷」という正教の伝統が体験できるような協力が求められました。誦経は第一回に比べて格段の進歩がありました。

後藤神父の講話は教区の連続講演会を兼ねていたので、外部からの参加者や、他教派の教職者の方の参加もありました。

春のコンサート

四月二二日（日）午後二時半～三時半、西日本教区センターにおいて春のコンサートを開催しました。協賛の関西盲導犬協会によるPRビデオ上映、バンド紹介のあと演奏開始。

Joke On The Puppy Old Time String Band。四人組のバンドで、アメリカ南部アパラチア地方のマウンテンミュージック（カントリーミュージック）。音楽の合間には軽妙な語りも入り、笑いの絶えないコンサートになりました。

今回はリタイア盲導犬（盲導犬育成活動PR犬）、マーティン君（一二歳）とブライト君（七歳）も参加。さわりたい放題ということで犬好きにはうれしいふれ合いの時間でした。家族連れも多く、参加者六六人。関西盲導犬協会へ（必要経費を除いた）募金の一部を寄付しました。

宣教講演会

五月三日（木祝）午後一時～三時、教区センターにてテーマ「アベルはなぜカインに殺されたのか」講演会が開催されました。講師はパウェル及川信師。

投影された画像を参考にしながら資料テキストを講読、いろいろな質問にも答えました。旧約聖書「創世記」、天地創造、七日間の神による創造の業、人間の創造、アダムとエバの陥罪、長男カインと次男アベルの神への奉献（ささげ物）、カインによるアベル殺害、カインの追放、カインの子孫の行く末などを講話しました。好天に恵まれ、市民の参加も多く、出席者三三人。

各教会の活動（教区後援）

京都教会

三月二一日（水祝）京都の西日本教区センターにおいて、ピサンキ（ウクライナエッグ、ろうけつ染め）講習会を開催しました。

午前の部、午後の部合わせて二八人の参加。お子さんを連れた家族連れや外国人の参加者も多く、半数は信徒、半数はチラシや新聞の情報欄を見た一般市民の参加者でした。

二時間の講習で、一こ、あるいは二このピサンキを仕上げ、みんな自分の労作に満足げでした。四月八日復活大祭に、この日染めたイースターエッグを飾った信徒もおられました。講師：岡田信子先生、ご協力に深く感謝します。

広島集会

昨年から教区の宣教活動として旅費補助をいただき、従来の秋の集会に加え、復活祭の聖体礼儀を行っています。今年も四月三〇日（月）、袋町学区会館に二七名が集まり、みんなで「ハリストス死より復活し」を歌い、一七名が領聖いたしました。昼食を挟んで午後からは、広く市民への宣教を目的に、松島神父を講師として「講演会」が行われ、一二名が参加、ハリストスの十字架と復活の意味について講話に耳を傾けました。伝統あるキリスト教としての正教に関心をお持ちのプロテスタントの牧師さんも来られました。五月一日はご高齢で集会に参加できない信徒宅へ廻家祈祷、パスハの喜びを分かち合いました。次回一一月二三日です。中国、四国、九州をはじめ周辺教会からの参加も大歓迎です。

九州管区

現在人吉市上林町の長司祭及川神父様のご自宅を九州管区司祭館としてお借りしております。先月、人吉ハリストス正教会の改修工事の際もお世話になった山上建設に依頼して屋根周りを中心に検査をして頂いた結果、老朽化に伴って屋根瓦が傷んでおり、雨漏りも始まっているとのことで早急に屋根の補修が必要であることが伝えられました。工事は七月一八日から開始されましたが、台風などの影響もあり、工事関係者のお話によると工事終了まで十日以上かかる見込みです。また今後、司祭館をどのように維持していけるのか、九州管区全体の問題として各教会の役員の皆様とも協議を進めていく予定です。

教区の行事　ご案内

―― 西日本教区センター（京都） ――

正教連続講座　13 時から 15 時

☆9 月 17 日（月・祝）　講師：パウェル及川信師　「はじめての正教会」

☆10 月 8 日（木・祝）　講師：ゲオルギイ松島雄一師　「ラドネジの聖セルギイ」

☆2019 年 1 月 14 日（月・祝）　講師：グリゴリイ伊藤慶郎師

特別講演会　13 時から 15 時

☆9 月 24 日（月・祝）　講師：和田芳英先生　「昇曙夢と日本正教会」

☆11 月 23 日（金・祝）　秋のコンサート　14 時から 15 時　バイオリンとピアノ

―― 第三回奉神礼基礎講座 ――

☆9 月 17 日（月・祝）　9 時半から 15 時半　大阪ハリストス正教会
神品、堂役、聖歌、誦経の連携

―― 冬季セミナー ――

☆2019 年 2 月 11 日（月・祝）　13～15 時　名古屋ハリストス正教会
「ロシア革命と正教会」仮題　講師：イリヤ・ハリン兄

―― 広島集会 ――

☆11 月 23 日（金・祝）　9:30～　聖体礼儀　詳細後日案内

―― 西南学院大学博物館企画展と講演会 ――

7 月 17 日から 10 月 20 日までの期間、福岡市内にあります西南学院大学博物館の 1 階特別展示室・2 階講堂におきまして「東方キリスト教との出会い―折りのかたちとその拡がり―」と題して企画展が行われております。日本正教会に関しても少し触れられております。開館時間は 10:：00～18:00（入館は 17:30 まで）、入館無料で日曜日は休館日となっております。仙台の大主教セラフィム座下もご協力下さっております。是非足を運んでみて下さい。

☆講演会　10 月 6 日（土）13 から 16 時

講師：鐸木道剛先生

場所：福岡市早良区西新 3-13-1　　電話　092-823-4785

新刊のご紹介

『神父になったサムライ』 及川信著

及川神父様による各地の講話、講演会の原稿をもとにした日本正教会の歴史に関する論考です。本書は表題となっている章に加え、中井木菟麿や京都正教会についてなど全部で 7 章から成ります。

希望頒布献金 1000 円

『ロシア正教会の聖歌』 J.V. ガードナー著

1977 年にミュンヘン大学で出版、1980 年に英訳され、現在に至るまで、正教会聖歌と奉神礼の入門書として世界中で愛読される著書の日本語版が西日本主教教区から出版されます。奉神礼と聖歌の基本的な構造、名称、特質などを学ぶのに最適の一冊です。　希望頒布献金 1300 円